エピソード１．

エメラルド・レジェンド

rosyeye

エンダ＆オィンガス

今日も「魔の山」は、その不思議な色彩を放ち、午後の光で濃い紫に変わっていく。

古くから、魔の山には異界への入口があるとの言い伝えもあり、近づく者は少ない。

エンダは森を歩くのが好きだ。　美しいブロンドの髪を風になびかせ、きらきらと輝くエメラルド色の瞳は好奇心に溢れ、祖母から聞いたバードたちのように詩を口ずさみながら、樹木の声を聞く。　魔女と噂されているエンダの祖母が、毎晩炉辺で語ってくれる膨大な神話・伝説や叙事詩から多くを学び、薬草の知識も身につけた。　祖母は、エンダが１６歳になったこの日、自分を試す旅に出てもよいと、エンダの母親の形見のペンダントをプレゼントしてくれた。　ペンタグラムの図象がついた、古びたペンダントに、エンダは、不思議なパワーが宿っているのを感じる。

ミースの平野を流れるボインは、空の天の川を地上に映したものだと信じられている。
オィンガスは、古代遺跡群の点在する平野を見下ろす丘で過ごすのが好きだ。
夜は丘の上で一人、古の大王や神官たちのように夜空の星を眺め、空からのコンタクトを期待していた。　ヒストリアンである叔父からは、戦いの歴史や星座の話を聞いて育った。　オィンガスは、戦史の話より星の話の方が好きで、スターゲイザーと自称していた。
１６歳の誕生日の今日、　「独り立ちする年になった。世の中を見てきなさい。」　と少し寂しそうな叔父は、白馬をプレゼントしてくれた。　　そして、「困った時の為に役に立つだろう。」とお守りのペンダントを首に掛けてくれた。

イリスのテレポート

　エンダは、「詩人の湖」を巡り、聖なる井戸でお祈りを済ませた。　魔の山の中腹まで登った頃には、すっかり日も暮れ、白い霧が濃くなってきた。　白いベールがエンダを取り巻く。霧の中から、ぼんやりと騎士が現れた。　「これが、黄泉の国へ連れ去る、あの亡霊の騎士？、、、。」　エンダは霧の中で、だんだんと意識が遠のいていった。

　オィンガスは、叔父からもらった真っ白な駿馬で、一気に北へと伝説の異界への入口がある山を目指した。　太陽の光が冬至や夏至に玄室を照らすという遺跡群やストーンサークルを通り過ぎる。

　三本の道が交差する場所に石塔が立っていた。　遺跡群には立ち寄る事もなく先を急いでいたオィンガスは、不思議な力でこの石塔に惹き付けられた。　伝説のリアフェイル（運命の石）と同じように、何かメッセージを発するのではないか、そんな気がしたのだ。　　ゆっくりと馬を降り、石塔に近寄る。　夕闇の中で石塔が光った。

　そして、ホログラムに少女が現れた。
「私はイリス・イヴィエール。　あなたの力が必要なのです。　必ず私を見つけて下さい。」
オィンガスは、イリスという名前をどこかで聞いた記憶があった、、、そう、「あの噂の“虹のイリス”ではないか。」
「イリス？　デル族の英雄、女神とも言われた方ですね。」
イリスは微笑んでいる。　「僕は何をすればいいのですか？　何処へ行けば貴方を見つけられるのですか？」
「あなたは選ばれた冒険家です。　まもなく旅の友にも出会うでしょう。　私を見つけて下さい。」
オィンガスは、更に尋ねる。　「イリス、あなたを助けるにはどうすれば？　あなたは、どの世界にいるのですか？」

イリスのホログラムは、弱くなってきた。
「これ以上長くは、、、お話できません。　あなた達は、これから違う世界へ移動するでしょう、、、
　では、必ず私を見つけて下さい。」　　イリスは、消えた。　石塔も光を失っていた。

　突然、稲妻が光り、突風が巻き起こった。　オィンガスは白馬と共に空中へ舞い上がり、雲の中を飛ばされていった。　気がつくと、雲の合間から、あの「魔の山」がぼうっと姿を現している。　　なだらかな丘の斜面に降り立つと霧の中で、光るものが見えた。　その方へ進んで行く、、、と、目の前に人が倒れていた。　オィンガスが見た光は、この人のペンダントから発せられていたのだ。
「おい！　大丈夫か？　こんな所に一人で、、、いったい何をしていたんだ、、、しっかりしろ。」
この無謀な少女は眠っているように見えた。　夜が更け、空気が冷え冷えとしてきた。
「とにかく、どこかに移動しなければ。」とオィンガスは、少女を乗せて馬を進めて行った。
やがて霧も晴れて、洞窟の入口が見えた。　少し奥へ入り、枯れ木で焚き火をおこすと暖かく居心地のいい場所になった。

　エンダは、誰かの声を聞いたような気がした。そして、馬に揺られているのを感じていた。
「亡霊の騎士に出会ってしまった私は、黄泉の国へ行くのかしら、、、」、寒さで体がこわばった。
やがて、周りが明るく、暖かいと感じられるようになった。　エンダはそっと目を開けた。

　「気がついたんだね。」亡霊の騎士が目の前でエンダに微笑んでいた。
エンダは、「この亡霊は怖くない、、、感じがいい若者だわ。」と思った。
「あなたは亡霊の騎士なの？　ここは、黄泉の国？」おそるおそるエンダはたずねた。
「僕は亡霊なんかじゃないよ、、ハハハ。　“選ばれた冒険家”さ！　君にとっては白馬の王子様といってもいいだろうね。」　オィンガスは笑いながら続けた。
　「無謀な冒険家さん、こんなところに一人で来るなんて。　僕はオィンガス、ついさっき、“選ばれた冒険家”に任命されたばかりさ。　それに、予言によれば、君は僕と冒険の旅友となる運命の人だと思うよ。」
「助けてもらった事には感謝しなくちゃね。　ありがとう、選ばれた冒険家さん。　私はエンダ、あなたとは旅の友になる運命、、って、、、誰の予言？」
「虹のイリスの予言だよ。　君はイリスって知ってるかな？」
「デル族の女神でしょ？」エンダも噂は聞いた事がある。　「今は伝説の人になっているけど、どこで出会ったの？」
「出会ったというより、テレポートと言ったほうがいいかな。　石塔のホログラムに現れたんだ。」
「冒険家としてのミッションは何？　宝探し？　黄金とか聖杯とか？」　エンダの好奇心が目覚めた。
「まだよく分からないんだ。　僕の力が欲しい、、、イリスを見つけて欲しいとだけ言われた。」

　オィンガスは、「今日はもう遅いから、明日の朝今後の事を話し合おう。」とエンダをなだめた。

異界へワープ

　朝の光が、洞窟にも差し込んできた。　オィンガスが目覚めた時、エンダは洞窟の周りを散策して木の実を集めていた。　　「お寝坊な冒険家さん、朝露の中で摘んだ木の実を召し上がれ！　妖精のパワーをもらえるのよ。」
エンダは元気を取り戻していた。　そして、これからの冒険に心を躍らせていた。
「この洞窟はずっと奥まで続いているみたい。　天井も高いから、あなたの白馬で進んでいけると思うわ。　ところで、あなたの素敵な白馬には、名前があるの？」
オィンガスは、まだ名前を決めていなかったことに気がひけていた。
「私が名前を付けてあげましょう。　アー、、、、アフィントンって、、、いい名前でしょ。」
エンダは、白馬を優しくなでながら話しかけた。
「今日から、お前はアフィントン、、、、これからアフィントンって呼ばれたら、どこにいても、私達の所へ駆けつけるのよ。」　エンダには動物や植物と会話できる不思議な能力がある。

　待ちかねたように、エンダは洞窟探検を開始しようと、オィンガスを急きたてた。
「洞窟の奥には、異界への入口があるという言い伝えがあるの。　昨日は、あなたが異界から来た亡霊の騎士だと思ったわ。」
オィンガスもその話はよく知っていた。　　「では、旅の友、エンダよ、異界へ出発の時が来た！」

二人はアフィントンに乗り、奥へと進んで行った。　洞窟は奥へ行くほど、暗く不気味だった。
松明に照らされて不思議な図象が次々と壁面に現れた。　渦巻き模様や動物の絵、テリアントロプス（半人半獣）が描かれている。
「古代の人達が残したメッセージにはどんな意味があるのかしら。」エンダは思いをめぐらせる。
「あの渦巻き模様は、時空のゆがみを表しているワームホールに見えるね。」とオィンガスが応じた。
突然、ブワーーーンとめまいを起こすような音が聞こえ、まばゆい光に目がくらむ。
アフィントンが嘶き、光に吸い込まれるように引っ張られて行った。
真っ暗な渦まきトンネルの中を二人は落ちていく、、、めまいが酷くなる、、、そして、、、青い光に包まれた。

青の洞窟から

エンダとオィンガスは、青の世界に飛んでいた。
「エンダ？　大丈夫か？　ここはあの“魔の山”の洞窟とは違うそ！」
「オィンガス？　私は大丈夫。　ここは“青の洞窟”みたいね。」
この洞窟には、狭い開口部から奥まで海が入りこんでいる。　　太陽の光が水底から照り返し、暗い洞窟内を青く光らせ、マリンブルーの幻惑的な世界となっている。
「引き潮で水深が浅くなれば、洞窟から出られるわね。」エンダは落ち着いていた。
「アフィントンがいないぞ！　ワームホールで行方不明になってしまったか。」オィンガスが嘆く。
「大丈夫、私が約束したから呼べば必ず現れるわ。　アフィントンには、どこか今いる場所で待機してもらっている方がいいでしょ。」

　二人は、洞窟から新しい世界へと出て行くことにした。
「情報を得るには都市を目指すのが一番。　ほら、“ベロス”って街の名前らしいサインポストがあるわ。」　　エンダがオィンガスに示した。
「アフィントンを呼ぶ？　歩くのも疲れるだろ？」　オィンガスは、実は、白馬を心配している。
「知らない世界で、あの目立つ白馬に乗って移動するのはどうかしら、、、しばらくは様子を見ましょうよ。」

泉の妖精

　二人は、一路“ペロス”を目指して、森に入った。　木漏れ日がきらきらと道を照らす。
ヘーゼルの木とオークの大樹に囲まれた、泉があった。
「とても冷たくておいしい！」エンダは泉の水で、のどの渇きを潤した。
オィンガスもエンダに続いて泉を覗き込んだ。　揺れる水面に二人の顔が映って微笑んでいた。
風が木々の枝を揺らした時、木の実が落ちて水面が波打った。
「僕達は知恵を授かったね。ハハハ。」オィンガスが親指を口に入れてウィンクする。
「知恵の鮭のお話なら知ってるわ、、、ウフッ、、、ついでに大きなオークもどんぐりからよね。」
物知り顔のエンダが切り返した。

　どこからか流れてくる弦の調べが耳に心地よい。
「この美しい調べはどこからくるのかしら？　何だか泉の底から湧いてくるみたい。」
また、木の実がおちて水面がゆれる。　二人は、泉の中に女性の姿を見た。
「君は、、、泉の妖精かな？」オィンガスが、水の中のその人に尋ねる。
「あなたが、奏でているのは、二胡？」エンダの質問に泉の妖精が応える。
「お気に召したかしら？　そう、これは二胡、綺麗な魂の人には、癒しの調べになるはず。」
「ワオ！　泉の精に出会ったね。　旅の始まりは吉だ！」　オィンガスは、喜びを隠せない。
「僕達は、“選ばれた冒険家”なんだ。　僕は、オィンガス、よろしく、泉の妖精さん？」
「私達は出会ってまだ２日目なの。　私は、エンダ、あなたはどなた？」
「私は、シャオ・ユイ。　泉の妖精ではないわ。　私も冒険家よ。　イリスと旅をしたこともあるわ。」
「ワオ！　イリスと旅したんだって。　ところで、これはホログラムなのか？」
「オィンガスはね、イリスのテレポートをホログラムで受け取ったの、、、私達は、彼女を探す旅に出たのよ。　どうしたらイリスに近づけるのかしら？」　エンダは、緑の瞳を輝かせた。
　「私は、イリスから、７人の冒険家のことを聞いていたわ。　この泉は、ワームホールになっていて、私の今いる空間へワープできるけれど、、、、。　先ずは、急がば回れ！　イリスの故郷のベロスから、イリスの旅路をたどって、ジエンディアのことを理解して欲しいの。」　シャオは、二胡の調べにあわせて歌うように話した。　「いつの日か、あなたたちと出合うのを楽しみしています、、、では、、、それまでごきげんよう！　再見！」　シャオは消えてしまった。

　イリスの出身地と言われるベロスは、思ったより小さな落ち着いた都市だと二人は感じた。街の人達は、とても親切で、イリスを誇りに思っているようだ。　　広場にいたロハンさんは、冒険家の歴史に詳しくて、オィンガスの叔父を思い出させる人だ。
　イリスがデル族の子孫である事、子供の頃に魔王からこの世界を守る為に旅立ったこと、家族を殺された事など、情報を聞きだすことができた。
「さあ、イリスの足跡を辿っていこう。」　オィンガスは、ジエンディアで最大の都市エリアスを目指そうとエンダの肩をたたいた。
「モンスターが潜む山林に入り、枯れ木の森を通っていくのでしょ？」エンダが確認する。
「この大陸は、デル族が治めていた頃は、平和で自然豊かな世界だったらしいな。」オィンガスは、遠くを眺めていた。
「イリスはお祖母さんまで、アガシュラ族に殺されたそうで、本当にかわいそう。」　エンダは涙目になった。
「全ては、魔王の悪のパワーが、この国を不安定にしているのね。」
「イリスは勇敢に戦ったのさ。　今ここは、何とか平和を保っているようだが、、、」　オィンガスは、ホログラムに現れたイリスを思い出していた。　　「イリスは魔王の手に落ちて、監禁されているのだろうか？」

　二人はベロスの街を後にして、鬱蒼とした森へ入った。
「アフィントン！　ここへ来て！　」　エンダが突然叫んだ。　すると、潅木の陰から白い影が現れた。
「やっぱり、来てくれたでしょ。」エンダは、白馬をなでながら、うれしそうにオィンガスを見た。
「えらいぞ、アフィントン！　これから、危険と出会うかもしれないが、お前がいればパワーアップ！　トリプルパワーで乗り越えられるぞ！」　　オィンガスは再会を心から喜んでいた。

　二人は、アフィントンの背に乗って、森へ進んで行った。
「 これって馬に乗る二人の騎士の図よね、、、私たち、テンプル騎士みたい。」　エンダもご機嫌だ。
すぐそばを、小さなモンスターたちが通り過ぎるが、アフィントンに乗った二人には気がつかないようだ。
やがて、次第に道幅が細くなり、二本に分かれる地点に石塔が立っていた。　　だが、しばらくたっても、ここでは何も起こらない。
「石塔は光らないわ。イリスのホログラムは見られないのね。」　エンダはがっかりした。
「僕達の判断に任されているのだよ。　エンダはどっちの道を選ぶ？」
「アフィントンに選んでもらいましょう。」　エンダは、興味をなくしたように言った。
とたんに、白馬は東へ向う道を走り始めた。　アフィントンには石塔のメッセージが伝わったのかもしれない。

　しばらくして、木立の合間に空き地が見えた。アフィントンは、サークル状に整地されている空き地で停まった。
　「アフィントンが休憩しろってさ。　このサークル状の土地には何か謂れでもあるのかね。」
「迷路みたいな模様が地面についているでしょう。　ラビリンスで瞑想しなさいということかもね。」
迷路の模様をたどりながらサークルの中心部へたどりついた時、エンダは体が軽くなった気がした。　目を閉じ、ヨガのポーズでゆっくりと呼吸に集中しながら、自身の内部深く入って瞑想を始めた。
　光が頭から入ってくるのを感じる。　額の奥に映像が見え始めた。
魔王のドラゴンたちが、この国中の地下の世界を破壊し、地上では川を氾濫させ、森の草木をもなぎ倒した。　この地を破壊したドラゴンは、一人の英雄、女神といわれる少女の剣で倒され、ドラゴンの地下の通り道は、水脈に変えられた。　　ここの地下には２つの水脈が交差しているのが見える。　　イリスはこの場所でも戦ったのだ。

　エンダの瞑想は、オィンガスの声で終わった。
「エンダ？　大丈夫か？　瞑想で何か感じたかい？」　オィンガスは瞑想が苦手だ。
「イリスをイメージできたわ。　魔王の手先のドラゴンを倒しているのが見えた。」

　二人は、休憩したラビリンスの空き地を後に、東を目指しエリアスへ向った。
薄暗い森は、次第に緑が少なくなり、やがて枯れ木だらけの森に変わってきた。
「大都市に近づくと、森が死ぬんだね。　枯れ木だらけだ。」　オィンガスは落胆していた。
「人が多く住むと確かに、自然が犠牲になるけれど、それだけではない気がするわ。魔王とドラ

ゴンのせいよ。　今も、魔王や生き残りのドラゴン、モンスターたちが、秘かに破棄活動をしているのが分かるわ。」
「イリスの居場所のヒントになりそうなイメージは見なかった？」
「水に関係しているかもしれない、、、透明の世界にいる、、、それだけ感じたわ。」

　遠くにエリアスの街が、霞んで見える。　二人は馬を下りて歩く事にした。
「アフィントン、ここからは、しばらくお別れだ。　あの大都会におまえを連れてはいけない。」
エンダもオィンガスの考えに従った。　　「アフィントンって呼んだら、また私達を助けに来てね。」
白馬は、二人を心配そうに眺め、それから森の奥へ風のように走り去った。

　大自然の中で育った二人には、エリアスは大都会で、長く滞在したくない場所だ。
「とにかく、腹ごしらえをしようよ。」オィンガスは、腹ペコだった。
「ヴェジタリアンのレストランを探しましょうよ。」　エンダが提案する。

大通りから少し入った静かな路地に、“緑の館”が建っていた。
ここは、オーベルジュで、１階が、オーガニック素材のカフェ＆レストラン、そして、２階に宿泊できるようになっている。
「“緑の館”って、感じがいいわ。　ここで食事して、一泊するのはどうかしら？」
エンダは、ここが気に入った様子だ。
「エンダ姫がお気に召したのなら、そうしよう。　アズ・ユー・ウィッシュ（お望みどおりに）。」　オィンガスはふざけて賛成した。

　昼食時間を過ぎて店は閑散としていた。　穏やかそうな笑顔の店の主人が現れた。
「お食事をなさいますか？　それともアフタヌーン・ティーになさいますか？」
「私は、ヴェジタリアン・メニューにしたいわ。」　エンダが微笑んだ。
「僕は、腹ペコだ、ボリュームある食事をしたいな。」
「メニューをどうぞ。　お嬢さん、ヴェジタリアン・コースはこちらがお勧めです。
本日の“シェフのスペシャル”は、オーガニック・ファームで育ったチキンの、ロースト･チキン・ハーブ･ソースとグリーン･サラダです。」
二人は、お勧めの料理を堪能した。　“緑の館”は夫婦だけで家庭的な経営をしている。
料理は、パティと呼ばれている奥さんがシェフ担当、サービスは、ご主人が担当している。
食事の後、ミントいりのハーブティーをサーブされた。　　二人は部屋の手配を頼むことにした。

　二階の部屋は、小さいながら清潔で快適だった。
「夕食は、ご希望でしたら７時から１階のレストランへ起こし下さい。　朝食はお部屋代に含ま

れております。　朝６時から、２階の朝食ルームで、ビュッフェ形式になっております。」
オィンガスとエンダは、夕食までそれぞれの部屋で一休みすることにした。　エンダはベッドに横になった途端、ぐっすり眠り込んでしまった。　部屋をノックする音でエンダは目が覚めた。
　ドアを開けるとオィンガスが立っていた。
「遅くなったけど、下のレストランに夕食に行く？」
「もうこんな時間？　寝込んでしまったわ。　あまり食欲がないからルームサービス頼める？」
オィンガスも午後遅い時間に重い食事をしたのでエンダの申し出に賛成だった。

　この季節は、観光客が少ないらしく、レストランも暇のようだ。
主人は快く、ルームサービスに応じてくれた。
「よろしければ、朝食ルームのほうでお召し上がり下さい。　今日は他にお泊りのお客様はいらっしゃいませんので、お二人でくつろげますよ。」　主人は、気配りの人だ。　　二人は、朝食ルームで、軽い夕食をゆっくり楽しんだ。

　レストランの閉店時間を早めたのか、９時過ぎた頃、主人が二人の所にやってきた。
「お食事はお楽しみ頂けたでしょうか？　よろしければ、少しご一緒させて頂いても？」
主人は何か話したい事がありそうだ。　二人は喜んで、歓迎の意を表した。
「では、少し冷えてきたようなので、あちらの暖炉のほうへ移動しましょう。」

　三人は暖炉のそばの居心地のよいソファへと移動した。
「私は、グレゴリーと申します。　親しい人達はグレッグと。　　お二人は、冒険の旅をしていらっしゃるのでしょう？　　驚かないで下さい。　私はお二人のお役に立つよう運命付けられているのです。　イリス様の配慮です。　イリス様も旅の途中ここへお泊りになりました。」
二人は、驚きを隠せない。　運命の力というか、何かの力でここへ導かれたのだと。
　「グレゴリー、、、あなたの使命を表すようなお名前ね。」　エンダが微笑んだ。
「グレゴリーって、、、たしか、ギリシャ語で見守るとかの意味があるよね。」　とオィンガス。
「はい、おっしゃる通りで。　　お二人はイリス様に選ばれた冒険家です。　あなたたちの祖先はデル族とも関係がありますね。　お二人は双子、別々の場所で成長されましたね。」
二人は、自分たちの知らない事を占い師のように告げるグレゴリーを不思議そうに眺めた。
「なぜ？？　デル族の子孫？　私達が双子？　　昨日であったばかりなのに？」　エンダは矢継ぎ早に問いかける。
「はい、あなたたちは、同じペンタグラムのパワーを秘めたペンダントを身につけられています。　　お二人とも誕生日が同じのはず。　お顔にも共通点がありますね。」
　「私は、昨日が１６歳の誕生日でした。」　　「僕は、昨日１６歳になった。」
二人は同時に声を上げた。　そして、古ぼけたお守りのペンダントをしげしげと眺めた。

　グレゴリーは、伝説を、そしてイリスについて話し始めた。
「あなたたちの世界、エメラルドの国　“カレドニア”にも、イリス様の祖先、デル族が、住んでいた時代がありました。　国中のドラゴンが、すべて追い払われて、平和が訪れると、殆どのデル族は、他の世界へと移ってしまったのです。　その後の壮絶な戦いで、多くのデル族が消えていきました。　イリス様は、幼い時に啓示を受けられました。　そして、魔王とドラゴンを倒すために、また、永遠のパワーを秘めるエメラルドを守る為に旅立たれました。　少女に何ができるのかと冷ややかな見方をする者もいましたが、、、ドラゴンを倒し、何とか魔王の力を封じ込められたのです。」
「ワァー、　イリスは、ジャンヌ・ダルクみたいに勇敢で、特別なフォースをもつ聖女なのね。」
　エンダに微笑みながら、グレゴリーが話を続ける。
「この国は、魔王の崇拝者達がまだ生き延びています。　　最近あちこちで、地下のトンネルや施設が破壊されたり、エネルギープラントが攻撃を受けています。　特に、ここエリアスのような大都市では、突然停電になることがあります。」　グレゴリーが言い終わらないうちに、電気が消え、真っ暗になった。

「キャンドルを用意しておりますから、ご心配なく。」　グレゴリーは、コーヒーテーブル、暖炉の上、ランプテーブルと次々にキャンドルの火を灯した。

　オーガニックにこだわっている、ビーワックスのキャンドルは、いい香りがして光もやわらかい。
　「このジエンディア大陸の彼方には、伝説のアトランティスが海底に沈んでいます。古の時代には、高度な文明が栄えており、今では未知のエネルギーとなってしまったパワーで、豊かな生活をしていたようです。　ある時、強力なエネルギーをコントロールできなくなり、巨大地震を誘発、、、そして海底に沈んでしまったと伝えられていますが、一説には、バリアで守られた場所で、今でも生活している人がいると信じられています。　そこへ行くには、永遠の火が燃える神殿で、火を守る巫女たちに認められたものだけが、透明なトンネルへ入る事ができると聞いています。」
「永遠の火、、、ブリギットやヴェスタの巫女みたいなお話ね。　イリスはその場所にいるかもしれないわ。　私がイメージで見たのは、透明の世界だった。」　エンダは瞑想で見えたイメージを思い起こしていた。
「この先、お二人は、アオイチを通過されることになります。アオイチには、“黒月城”があり、黒月姫という方が住んでおられます。　この方は２年前までイリス様と一緒に旅をなさっていたようです。　何かご存じかもしれません。」
オィンガスとエンダは、グレゴリーの話にすっかり夜の更けるのも忘れていた。

　翌朝は、素晴らしく晴れていた。　朝食を済ませ、階段脇のカウンターでベルを鳴らすと、パティが現れた。
「昨夜は夫が遅くまで失礼致しました。　只今は食材の仕入れに出かけております。　お二人には、くれぐれも宜しくと申しておりました。　これをお二人にお渡しするようにと。」　封筒と２つの小箱が渡された。
「では、旅の安全を祈っております。　ボン・ボヤージュ！」

　エンダとオィンガスは、“緑の館”に別れを告げ、大都会を後に、アオイチへ向った。　　二人は気になっていたグレゴリーのプレゼントを確かめる事にした。
「わあ、、素晴らしい宝石だわ、、、エメラルドだわ、、、、」　小箱を開けたエンダが興奮して叫んだ。
「ほら、こうして２個揃うとエンダの瞳みたいだね。」　オィンガスが茶化した。

　封筒には、イリスからの手紙が入っていた。
「選ばれた冒険家さんへ、
この手紙を読んでいるあなたは、７人のメンバーに選ばれました。
エメラルドの伝説はご存知の事でしょうが、、、天から墜落したルシファーの額からはがれ落ちたあのエメラルドです。　　７つの欠片のエメラルドをメンバーに分け与えます。　全てが揃い、一つになる時、巨大なパワーが生まれます。
魔王の手に渡してはなりません。　私を助けに来てくれるのを待っています。　　イリス　」

　黒月城はすぐ目の前にそびえていた。　円形の外壁に囲まれた城の門は、二人を歓迎するかのように開け放たれていた。　前庭の向こうで、城の扉がゆっくりと開き、黒い影が現れた。
「こんにちは、　私はエンダ、、、それから、彼は、オィンガス。　　私達は旅をしています。　グレゴリーさんに、こちらの事を聞いて、立ち寄りました。」　エンダは、影に向って挨拶した。
「どうぞ、中へお入り下さい。　御主人様をお呼びしてまいります。」　執事らしき人は、階段を登っていった。　素晴らしい調度品に混じって不思議なコレクションが飾られている。

　「黒月城へようこそ。　私は黒月姫、あなたたちの国では、ブリギットという名前に当たります。」　黒月姫は、凛とした態度で自己紹介を終え、二人を応接の間の椅子へと導いた。
　「早速ですが、イリスのミッションを果たしたいのです。　ｲリスが何処に今いるのか、ご存知ですか？」　オィンガスが切り出した。
「私は２年前まで、イリスと旅しておりましたが、今彼女がどうしているかは分かりません。
魔王の配下たちの殆どを倒すことができた後、ここへ戻ってきました。　この２年間は、多くの犠牲となった魂を癒し、この国の人々の幸せと平和を祈る為、新月の儀式を執り行うだけで、今は静かに暮らしています。　私は、あと１８年間はこの城で、１８人の乙女達と聖なる火を守る儀式を行っていかなければなりません。　イリスは、邪悪な魔王とドラゴンたちから、アトランティスを守る為、冒険家を七人選びました。　ミッションを受けた冒険家には、エメラルドが授与されているはずです。」
エンダとオィンガスは、そっとエメラルドを握りしめた。
「僕達は、他の冒険家たちとはいつ、どこで出会えるのでしょう？」
「イリスの計画のことは、よくわかりません。　ジエンディア大陸の東の果てに、海中に沈んだ

アトランティスがあり、そこへ近づく、ランス・エンドという場所に、ヴェスタ神殿があり、永遠の聖火がヴェスタと６人の巫女達に守られています。　７人の冒険家が揃った時、それぞれに、試練が言い渡される事でしょう。」

　黒月姫は噂されているように、イリスと仲たがいしているわけではない。　自分のミッションの為に城にこもっているのだ。　　二人は、黒月城に別れを告げて、ランズ・エンドを目ざして行った。
城を出た後、先を急ぎたい２人は、アフィントンを呼び出した。　　夜になる前には、海岸までたどり着きたい。

　アフィントンを駆って、水平線に日が落ちる頃、エンダとオィンガスは半島の突端にあるランズ・エンドの丘にたどり着いた。　　まさに太陽が海の中へ沈もうとしていた。

　「オィンガス！　ねえ、今の見た？」　エンダが興奮して叫んだ。
「すごい！　　緑の太陽光線だ！　　グリーンフラッシュだ！」
「ねっ！　私達は、何でも見通せるパワーが身についたのよ。　どんな難問にも答えられるわ、きっと！」
「少しだけ、イリスの世界に近づけたかな？」　オィンガスは、力がわいてくるのを感じた。

　丘の上には、ヴェスタの神殿が、夕日の最後の名残の中で、輝いて見えた。　　待ち受けている、巫女達による試練とは、どんなものだろう？　これから遭遇するだろう難題や、他の冒険家たちとの出会いに心躍らせ、神殿へ向う二人だった。

　ヴェスタ神殿には、６人の巫女たちが、ヴェスタの為に世俗を捨て、永遠の火、聖なる火を守って暮らしていた。　国を守る為に選ばれた巫女達は、特別な待遇を受けており、権力も持っていた。　　大陸最果てのランズ・エンドから、伝説のアトランティスへ行く為には、儀式で認められなければならなかった。
「最後の二人が到着すれば、これで七人揃う事になりそうね。」
巫女達は、選ばれた冒険家らしき二人の訪問者が丘を登ってくるのを見ていた。

　丘の方から、二胡の調べがかすかに聞こえる。　　あれは、再会を予言していたシャオ･ユイが奏でているのだろうか？　彼女も選ばれた冒険家の一人なのだろうか？

エンダとオィンガスは、無事に行けるのだろうか？　このジエンディア最果てのランズ･エンドから、あのアトランティスへ、、、、。　　そして、イリスは？

エピソード1　　終わり